

## ICTを活用したFDシステムの構築

江本理恵・後藤尚人

岩手大学大学教育総合センター

### 1. はじめに

高等教育機関を取り巻く状況が急激に変化している中、各大学はその変化への対応を迫られている。この対応を進める上での問題点の1つに、大学教員の意識の問題が挙げられる。大学教員は、専門分野については常に研鑽しても、「大学」や「教育」に関することには興味がない場合が多く、変化に対応するための各種方策を単なる「負担増」と捉え、非協力的であることが多い。

このような状況において大学設置基準の一部が改訂され、「教育内容等の改善のための組織的研修等」、いわゆる「FD（ファカルティ・ディベロップメント）」が義務として大学に科せられることになる。今後、この「FD」を実質化させた大学とそうでない大学との間で大きな差が出るのが予想され、「FD実質化」は大きな課題の1つになると考えられる。

### 2. FDの実質化の方策

日本の大学におけるFDは啓蒙段階から普及段階に入ったと言われ、学生による授業アンケートやFD講演会、FD合宿研修会、授業参観などが多くの大学で実施されている。しかし、これらの「FD定番メニュー」が日常的教育活動からかけ離れた「イベント」となっていることも多く、実質化にあたっては、どれだけFDを「日常的な教育活動の文脈に組み込むか」が問われている<sup>(1)</sup>。

例えば、ボトムアップの教員相互研修型FDとして、京都大学の公開実験授業、学部公開授業等の取り組みが知られている。京都大学では、さらにそれを組織化する「相互研修型FDの組織化」（平成16年度特色GP採択）に取り組んでいる。これは、「日常的な教育活動」の中にFDを取り入れる試みである<sup>(1)</sup>。

このような先進的で優れたFDの取り組みを「日常的な教育活動」に組み込もうとした時の最大の壁は、教員の間にある「授業はそ

の教員個人のものであり、他の教員は介入すべきではない」という意識である。この意識があるため、「授業参観」等のFD活動を行おうとしても、「他の教員の授業を参観し、意見を述べる」という活動が受け入れられない大学も多いだろう。

本来、高等教育機関として大学で行われる授業は、大学が学生に提供する教育課程を担う授業科目であり、個々の教員に属するものではないはずである。しかしながら、未だに大学の教員の多くの意識は「私の授業」であり、お互いに公開したり参観したりはせずに、研究室、教室に閉じた教育活動を行っている。

これらの状況を改善し、FD活動を実質化するためには、まず、「全教員を対象に」「私の授業」を「大学の授業」に意識改革するための支援システムが必要であると考えられる。

### 3. 教育支援システムアイアシスタントの全学的導入

岩手大学大学教育総合センターでは、FD活動の基盤としての教育支援システム「I Assistant（アイアシスタント）」を全学的に導入した<sup>(2)</sup>。アイアシスタントの基本機能は、「シラバス」と「授業記録」である。この「基本機能」は授業実施におけるPDCAサイクル（授業計画（シラバス）の作成：Plan → 授業の実施：Do → 授業記録：Check → 改善策の検討：Action）を実施するための機能である。このシステムは学務情報と連携しているので、教員も学生もログインすれば自分の担当・履修している授業の時間割が表示され、その科目に関する「シラバス」や「授業記録」などの各種機能を利用することができる。

「FD」の観点からこのシステムを見た場合、重要なポイントは以下の3点である。

- ① 授業実施におけるPDCAサイクル
- ② 授業関連情報の公開・共有
- ③ ICT活用による新しい授業方法の実施

まず、「授業記録」を科せられることにより、教員は「日常的な教育活動」を記録することになる。これにより、自身の教育活動の振り返りが促され、次回以降の授業計画、しいては次年度の授業計画の立案に反映されることにつながる①。おそらく多くの教員はこういった作業を個人単位で（例えば講義ノート上で）実施していたと考えられるが、この①を Web 上で行う意味は②にある。つまり、「アイアシスタント」は、教員個人の研究室や教室に閉じられた状態だった教育活動を、学内に開かれた状態に変えるためのシステムである。「日常的教育活動」を公開・共有することで、例えば、自分の授業の学生が同時に受講している授業では何を学んでいるのか、前の学期ではどのような授業を受けてきたのか、その方法、内容等を共有し、自分の授業内容の見直しを行ったり、授業方法について再考したりすることが可能となる。

今後、FD 活動を実質化させるにあたって、まずは「全教員がお互いの教育活動を《共有》できる基盤システムを整える」、これがアイアシスタント導入の意義である。

#### 4. 実施結果と今後の課題

アイアシスタントは、平成 18 年から試行し、平成 19 年度に本格稼働を開始した。本格稼働にあたって、前年度の 1～2 月にシラバスの入力を行う必要があり、この過程で、センターでは複数回の説明会、講習会を行った。参加者はシラバス入力期間直前の 1 月上旬が最も多く、延べでは 200 名程度（全教員約 420 名）である。

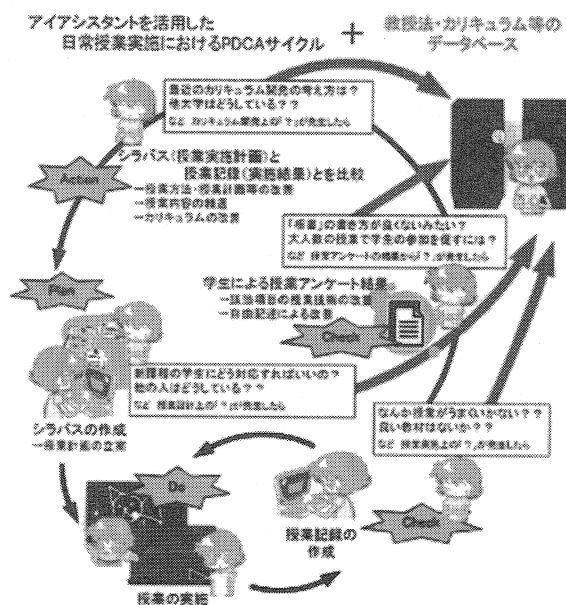
シラバスの入力状況は、学部により若干の差はあるが、学部・大学院の全開講科目（非常勤講師担当分を含む）の 82%に上がる。稼働初年度として、シラバス入力率は十分満足できる結果だと考えられる。

しかし、前期に開講された授業の全学共通教育授業アンケート等の結果からは、授業期間中には十分に活用されていない状況が見えてくる。「この授業の学習において、あなたはどのぐらいアイアシスタントを利用しましたか？」という問いに対して、情報科目を除く共通教育科目では、約 80%の学生が「まったく使わなかった」と回答している。また、教

員を対象としたアンケートでも、「時間がない」「クラス人数が少ないので使う必要を感じない」といった意見が寄せられた。

当初、説明会や講習会では、「アイアシスタント」の利用は、「学生のため」、「より良い教育実施のため」を主張していたが、FD 活動の一環であることや、各種外部評価、第三者評価対策でもあることも積極的に伝える必要があるだろう。

今後の課題は、この「アイアシスタント」を基盤においた岩手大学の FD を実質化することである。それには、高等教育を取り巻く状況の変化や大学設置基準の改定等も含めた FD の必要性、その中での「アイアシスタント」の位置づけ等を構成員に伝える努力（説明会や講習会の実施、パンフレットの作成等）を行うこと、そして、PDCA サイクル中やカリキュラム検討中に問題点が発生したときに、その解決に役立つ情報を入手できるデータベースの整備を行うこと等が考えられる。



図：アイアシスタントを基盤にしたFDシステム

#### 参考文献

- (1) 京都大学高等教育叢書 25 相互研修型 FD の組織化による教育改善 2006, 京都大学高等教育研究開発推進センター, 2007.
- (2) 江本理恵・後藤尚人, I<sup>st</sup> Assistant (アイアシスタント) の全学的導入と FD, 第 13 回 大学教育研究フォーラム発表論文集, 86-87, 2007.